

SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

No 17
2023.07



巻頭インタビュー：呑海沙織教授

(筑波大学副学長・筑波大学附属学校教育局教育長)

かわり、つながることによって

本号では、本年度 4 月より附属学校教育局教育長になられた呑海沙織先生にお話を伺います。

先生のこれまでのご経歴を教えてください。

この度、筑波大学附属学校教育局教育長を拝命いたしました呑海沙織と申します。私は京都大学、奈良女子大学の図書館員を経て、1998 年の 7 月より、筑波大学で教育・研究に従事しております。専門は図書館情報学で、「知識情報による共生社会の創出」や「認知症にやさしい図書館」を研究テーマにしております。

幼い頃から、本にご関心を持っていたのでしょうか。

はい、私は子供の頃から読書がとても好きで、本の中に分からない言葉が出てくると、国語辞典を引きながら本を読んでおりました。今でも覚えているエピソードとして、幼稚園の頃には、休憩時間になると先生から「外に出て遊びましょう。」と言われたのですが、私は「休憩時間だから、大好きな本を読みたいです。」と先生にお答えしていた、ということがありました。学校図書館にもよく通い、読書に夢中になっていました。

成人した後は図書館での勤務経験を通じて、やがて図書館で働く方たちの教育に携わりたいと思うようになり、図書館に携わる人材を育成する仕事をいただく機会に恵まれて、現在に至っています。



ご研究テーマの「認知症にやさしい図書館」について教えてください。

高齢化や多様化が進む社会において、図書館のあり方も変化してきています。

2017 年 10 月に、「認知症にやさしい図書館ガイドライン（第 1 版：超高齢社会と図書館研究会より）」を策定しました。「認知症にやさしい図書館」を目指そうとする図書館のための指針です。

「認知症にやさしい」とは、“Dementia friendly”の訳語で、「あらゆる人が認知症について知り、理解することで、認知症の人が『理解されている』『存在価値がある』『地域に貢献することができる』と感ずることができる状態を意味します。認知症に対する社会的スティグマは、認知症の人やその家族の尊厳を損なうとともに、認知症の早期診断・早期治療に悪影響を及ぼす可能性があります。「認知症にやさしい図書館」は、あらゆる人が認知症について知り、理解することで、認知症に対する社会的スティグマを低減することを目指しています。

つまり、「認知症にやさしい図書館」のサービス対象は、認知症の人やその家族に限定されるものではありません。「認知症にやさしい図書館」というと、「どうして認知症に特化するのですか」というご質問をいただくことがありますが、「認知症にやさしい図書館」は、認知症に特化したものではなく、結果的にすべての人にやさしい図書館であることを意味します。

超高齢社会において図書館は、高齢者の生きが

共生の社会を一緒に創る

い創出や世代間交流においてさらに重要な役割を果たすことになると考えています。

共生社会への思いについてお聞かせください。

先ほど申し上げた、当事者の方に「してあげる」「支えてあげる」という接し方をするのではなく、個人の尊厳や生きがいを尊重するという姿勢は、特別支援教育でも同様なのではないでしょうか。

先日、普通附属の生徒と特別支援の生徒が一緒に活動を行う際に、普通附属の生徒が特別支援の生徒を手助けしようとするのではなく、純粋に障壁となることを工夫しあって乗り越えているというお話をおうかがいしました。このような関係性は、お互いに相手のことを理解しようとする姿勢が前提となっていて、素晴らしいと思います。

相手を知って理解し、実際にかかわってつながること、工夫が必要であれば一緒に模索することにより、共生の社会を皆で一緒に創っていかたいですね。

附属特別支援学校への期待について、お願いします。

連携推進グループが運営している「教材・指導法データベース」にも掲載されていますが、附属特別支援学校の授業で活用されている教材や指導法の中には、対象とされている方以外にも活用が考えられるものが多くありますし、認知症の人にも応用できると思われる教材も含まれています。附属特別支援学校のエデュケーションや研究における高い専門性の蓄積については、特別支援教育の枠組みだけで収めようとせず、我が国のインクルーシブ教育システムの構築に貢献していけるように、その取組や成果を広く発信されることを期待しています。

おわりに

私達のインタビューに時折大きく頷かれながら、一つ一つの質問に対して丁寧に教えてくださいました。個人の尊厳を重んじることの大切さや共生社会の実現への思いに触れられ、当事者の声を大事にしながら、ご自身の教育や研究活動を進めていこうとするお気持ちに、深く感銘を受けました。

お好きな本についても話題にしてください、インタビューの空間が穏やかで温かな雰囲気になりました。



「認知症にやさしい図書館ガイドライン（第 1 版）」

今回のインタビューにあたり、呑海先生より下記の資料をご紹介いただきました。

- ・「認知症にやさしい図書館ガイドライン（第 1 版）」（2017）超高齢社会と図書館研究会
- ・「認知症とはじめまして、そしてよろしく。」（2022）筑波大学情報学群知識情報・図書館学類



* * * * *

このインタビューは 2023 年 6 月に附属学校教育局教育長室で行われました。

(聞き手：連携推進グループ 竹田恵・橋本時浩)

附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取組がたくさんあります。

ランチルームに慣れることから 「食べる力は生きる力」

附属久里浜特別支援学校に栄養教諭として長年勤務されている中田秀子先生にお話を伺いました。

知的障害を伴う自閉症の子供の食傾向について教えてください。

多くの子供は、食に対して強い偏り（偏食）やこだわりを持っています。入学時には、食べられる食材の数が非常に限られている子供もいます。幼児児童の個々の実態は様々ですが、多くの子供に「食べることに興味が少ない」か、反対に「好きな食べ物を好きなだけ食べてしまう」かのどちらかの傾向があります。野菜嫌いの子供も多く、食べられる野菜が食べたことがない野菜に混ざっていると、食べられる野菜も残してしまうこともあります。また、朝から嫌な事があったり、受け入れられない事（予定の変更や、衣類・靴下などが濡れて不快になったりなど）があったり、周囲の苦手な音や声などを耳にしたりなどしても、食べないことがあります。献立の中では、カレーやシチューなどのように、いろいろな材料が混ざった料理よりも、魚や肉が単品で素材が分かりやすく、かつ、シンプルな調理法の献立を好む子供が多いです。

例えば、鮭の塩焼き、鶏肉の照り焼き、鶏肉の唐揚げ、鯖の竜田揚げなどを好む傾向があります。口の中で食材が混ざることが嫌な子供も多いので、単品の献立を好むのは、それが一因になっているのかもしれません。食べ

方も大多数の子供が一品ずつ片付けていく食べ方を好みます。異なる味の食べ物が、口の中で混ざることには抵抗があったり、口腔過敏があったりする子供もいます。いずれにしても、食に対する強いこだわりは、単に障害の特性というだけではなく、食の体験が乏しいことも原因の一つだろうと考えています。

偏食改善のために、給食ではどのように対応をされていますか。

食べたことがない食材や献立を体験させることを繰り返して、それぞれの「こだわり」を低減し、改善していく必要があります。しかし、「こうすれば食べられるようになる」という近道はないので、一步一步、地道な指導を重ねています。給食の最初のステップは、ランチルームに慣れることです。自閉症の子供たちは、初めての場所、慣れない場所などが苦手で、中に入ることができないことがあります。大勢の人がいる場所が苦手な子供も多いので、ランチルームに入って席に着き、自分はその日の給食を食べることができなくても、友達が食べ終わるまで座って待ってられるというのは、実はすごいことなのです。ランチルームに慣れたら、次は献立や食材に「見慣れる」こと。今まで食べたことがない食べ物をチラッと見たり、匂いを嗅いだりなど、食べ物に興味を示すだけでも前進です。その次はいよいよ、食べ物を「口に入れること」になります。子供がチャレンジしやすいように、食材を小さく切って、小鉢に少量入れて見せます。そして、教師が美味しそうに食べるところを見せながら、表情や言葉で伝えます。最初は、小鉢を押しつけて、「いらない!」と拒否する姿が多く見られますが、少しずつ食材に触れるようになり、次第に野菜のほんの小さな欠片ですが、口に入れるというチャレンジをしてくれるよう



になります。本校の教師は、少量でも初体験の食べ物を口に入れることができれば、大いに褒めることをしています。褒められると、「また食べてみようかな」という気持ちになってくれる子供が少なくありません。中には、同じクラスの友達が教師に褒められているのを見ると、「自分も褒めてもらいたい!」という気持ちから、頑張って食べる姿を見せてくれる子供もいます。

ただ、このまま順調に進むわけではないのです。週明けの月曜日や長期休業明けなどに、給食の喫食量が落ちる傾向があり、これは、低学年ほど顕著です。それでも、日々の地道な指導を繰り返し、月曜日から金曜日にかけて、あるいは1学期から3学期にかけて、スモールステップで積み上げていくので、学年が上がるにつれて、少しずつですが食の幅が広がっていきます。

偏食の改善が比較的スムーズな子供もいれば、ゆっくりな子供もいます。子供一人一人、成長のスピードが違ったり、大きく成長する時期が異なったりするので、時には待つてあげることも必要になります。小さなステップでも、毎日続けることで、着実に「食べる力＝生きる力」が身に付いていくと思います。

普段から心がけていることは何ですか。

給食ではいろいろな食体験をさせることに重きを置いています。食材に限らず、切り方、食感、味、全体の色合い、そしてそれらを組み合わせ、子供たちが「今日の給食は何かな〜?」とワクワク感を持ってくれるような献立になるように心掛けています。また、時には子供たちのリクエストも取り入れながら、好きな食べ物を励みに、苦手な食べ物にも自ら進んで食べようとする気持ちを育てたらよいと思っています。



子供たちは一人一人、好きな食べ物やこだわりが異なるので、給食の品数が少なくて、一品の量を多くすると、その日の給食を全く食べられない子供も出てきます。そのため、品数、使う食材数を増やして、一品でも、一食材でも食べてもらえるように工夫しています。現在、52人の子供が在籍していますが、52通りの献立は作れないので、好きな献立や苦手な献立の日、あるいは、食べたことがない、見たことがない食べ物など、子供たちにはイメージが思い浮かばない献立の日もあると思いますが、それでも繰り返し給食に出すようにしています。それは、「見せる」ことも食材を知る機会・学習の場として大切だと考えているからです。献立作成時には、一膳の中に、醤油（塩）味、甘い味、酸っぱい味などを組み合わせ、同じような味ばかりにならないように気を付けています。食感・歯触りの違いも感じて欲しいので、様々な切り方を組み合わせています。形が変わると、同じ食材なのに食べなかったりする子供もいるので、形が変わっても人参は人参、大根は大根と理解させたいですから。また、季節を感じられるように、旬の食材や年中行事なども意識して取り入れています。

栄養教諭をしていてよかったと思うことを教えてください。

子供たちが少しずつ食べられる物が増えて、笑顔の回数が増えた時は、本当にうれしくなりますね。

（聞き手：連携推進グループ 稲本純子）

教材・指導法データベースについて

筑波大学特別支援教育教材・指導法データベースでは、附属特別支援学校5校の先生方が普段授業で活用している教材・指導法をweb上で発信しています。2023年7月の段階で570教材を掲載し、英語版についても76を超える国・地域からアクセスをいただいています。

データベースでは「どのような子どもに」「どのような指導で」使用しているのか、指導の意図や期待される効果等を紹介しています。実際の指導場面の様子を画像や動画で紹介しているものもあります。

「障害種別」での検索、国語・音楽等の「各教科別」の検索、特別活動等の「教科以外の場面別」検索はもちろんのこと、フリーワードでの検索も可能です。そのため、どのような指導がしたいのか・子どもがこのような難しさを示している等、複数の視点から教材を探すことができます。特別支援学校だけではなく、小・中学校等にも活用できる教材も多く掲載されています。

データベースに紹介している教材の多くは、身近にあるものをちょっと工夫してみました、というものです。掲載教材を見ただきながら、担当している子どもの実態やねらいに応じて、例えば素材の種類を変えたり、大きさや重さ、厚み等を工夫したりしながら活用してみてください。データベースは随時、新規の教材を掲載しております。「筑波大学特別支援教育 教材・指導法データベース」を、皆様の授業にぜひご活用ください。



URL: <https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/kdb/>
 <「筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース」検索画面>

令和5年度 現職教員研修について

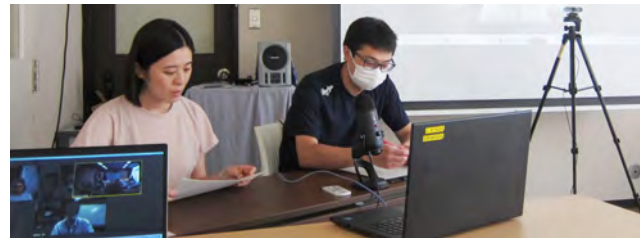
今年度、連携推進グループでは、全国から2名の先生の研修をお受けします。当グループの現職教員研修には、専門性向上研修（1年間・6か月間）と指導力向上研修（3か月・1か月）の2つがあります。研修期間によって講義・演習、学校や関係機関の見学の違いなどありますが、どちらも5つの附属特別支援学校（附属視覚・附属聴覚・附属大塚・附属桐が丘・附属久里浜）で、現場の幼児児童生徒や教職員との関わり、授業研究などを中心として進めていく点が大きな特徴です。

4月から北海道札幌養護学校白桜高等学園から千葉彩也香（あやか）先生をお迎えしています。7月まで附属久里浜特別支援学校で実践実習を行いました。この間7月13日には研究授業も行い、前半の実践実習を無事に終えられました。2学期には各附属学校の見学と、9月14日には中間報告会を行います。

10月から12月までは附属大塚特別支援学校での実践実習に入り、「知的障害特別支援学校高等部におけるキャリア教育の視点から考える授業づくり」をテーマに研究にも取り組みます。



授業と授業研究会の様子



令和6年度の募集要項はホームページでもご覧いただけます。
<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>

令和5年度 5附属連絡会議について



5附属連絡会議の様子



中村先生の発表

令和5年度の5附属連絡会議のテーマは、「お互いを知る、学び合う」です。本年度の5附属連絡会議は、お互いの障害種の実態や指導法等について知り、意見交換や情報提供等を通じて学び合うことを目的として学習会を開催し、構成員の先生方に持ち回りで発表いただきます。6月29日に第1回目の学習会（『附属聴覚特別支援学校における教材作成のポイント』講師：橋本時浩先生、『見えにくさのある子どもへの配慮と支援』講師：中村里津子先生）を開催し、2名の連携推進グループ員が講師を務めました。9月以降、附属聴覚、附属大塚、附属桐が丘、附属視覚、附属久里浜とつないでいきます。この学習会は、附属学校の先生方も広く参加を呼び掛けています。また学習会後2週間、オンデマンドでの視聴も可能です。

令和5年度 共催セミナーについて

今年度の共催セミナーはテーマを『インクルーシブ教育システムの構築を目指して～発達障害等における教科学習（国語・算数）時の配慮と支援の在り方～』としました。参加者がそれぞれの学校や指導場面で果たす役割等について理解を深め、今後の実践につなげるための機会としていただけたらと考えています。詳細は以下の通りです。オンデマンド開催ですので場所や時間を問わずに参加することができます。沢山のお申し込みをお待ちしております。

○開催日時 10月2日（月）～10月31日（火）

○開催方法 オンデマンド

○講演

- ・「インクルーシブ教育システムの構築を目指して～発達障害等における教科学習（国語・算数）時の配慮と支援の在り方～」
- ・講演1「発達性ディスレクシアの理解と支援」
三盃亜美先生（筑波大学障害科学域助教）
- ・講演2「算数障害の理解と支援」
熊谷恵子先生（筑波大学障害科学域教授）

参加費 無料
 筑波大学人間系インクルーシブ教育システム開発リサーチユニット
 筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ共催

令和5年度特別支援教育研究セミナー

インクルーシブ教育システムの構築を目指して「発達障害等における学習（国語・算数）時の配慮と支援の在り方」

講演

「発達性ディスレクシアの理解と支援」
 講師：三盃亜美先生（筑波大学障害科学域助教）

講演

「算数障害の理解と支援」
 講師：熊谷恵子先生（筑波大学障害科学域教授）

視聴申し込み期間 令和5年7月10日（月）～令和5年10月20日（金）

日時 令和5年10月2日（月）～31日（火）
 オンデマンド

インクルーシブ教育システム構築に向けた障害理解について学びを深めるためのセミナーです。ここでは、学習障害について、特に国語と算数に焦点を当て、個別的教育的ニーズに応えるための配慮と工夫について考えます。

筑波大学特別支援教育連携推進グループ
 （インターネットにて受け付けます。）
 受付：https://docs.google.com/forms/d/1UXN1ag4WoVnN30il_m7cae00Rkz_AKp0e1Mh168M/edit
 問い合わせ：snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp

視聴予約受け
 お問い合わせ

セミナー - ポスター

editorial Postscript

編 集 後 記

免許法認定公開講座、書籍の発刊、共催セミナー、現職教員研修の各事業について 4 月から準備を進めて参りました。グループの活動も充実したものになっています。

本号では、附属学校教育局教育長の呑海沙織先生にお話を伺いました。「認知症にやさしい図書館ガイドライン」のお話の他に、共生社会の実現につながる附属学校の取組についても触れられ、私たちに新たな気付きをもたらせてくださいました。ご多忙の中にもかかわらず取材に丁寧にお応えいただきましたことに心より感謝申し上げます。

さて、本年度のグループの構成員は下記の4名です。それぞれが、特別支援教育について学びを深め、附属学校、附属学校教育局、大学との連携のため努力して参ります。本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

(橋本時浩)



中村里津子

附属視覚特別支援学校



橋本時浩

附属聴覚特別支援学校



竹田恵

附属桐が丘特別支援学校



稲本純子

附属久里浜特別支援学校

表紙：「夏の便り」筑波大学附属学校教育局

SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット17号（通巻 第65）2023 年7月28日発行

発行 / 編集：筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1

電話：03-3942-6923・6937 FAX：03-3942-6938

e-mail：snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp

<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2023 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（本誌記事の無断転載を禁じます）